

# 「今めかし」小考

## 『栄花物語』における類型の摂取について――

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 吉田小百合

『栄花物語』巻三において、中関白家の家風の一つとして、「今めかし」であったことが作者によって提示される。しかし、他の作品を確認しても、中関白家の家風が「今めかし」であるとすると資料はない。作者は何を根拠に中関白家の家風を「今めかし」としたのか。家風については伝聞によって得た情報（加納重文「記述の誤りをめぐって」〔『歴史物語の思想』所収、平成四年十二月刊。初出は「栄花物語の記述の誤りをめぐって」『国語国文』四〇巻九号、昭和四十六年九月刊〕とも考えられるが、中関白家が活躍した平安中期の「今めかし」の語義については、肯定的な意味のみならず、時に否定的な表現とされていたことが先行研究によって指摘されている。そのような時代的な意義を念頭に置くと、中関白家が実際に「今めかし」きことを家風にしたとは考えにくい。

先行する文学作品の用例を調べると、非常に興味深い事実が明らかとなる。『源氏物語』において、光源氏と対立する一家の右大臣家に連なる人々に「今めかし」が多用されることは先学によって指摘されているが、筆者が『源氏』以前の用例を検討したところ、『宇津保物語』や『落窪物語』にも同様に主人公と対立する一家に対して「今めかし」が用いられていることが明らかとなった。作者が物語を執筆する際、先行する物語作品に見られる類型を『栄花物語』において主人公と対立的構図を持つ中関白家に用いたのは、かなり意図的であったとみて良い。

論証の手順として、本稿ではまず『宇津保物語』から『夜の寝覚』までの用例を検討した。その検討で得られた結果をもとに、『栄花物語』の中関白家の家風として用いられた理由を考察していく。

キーワード：『栄花物語』 中関白家 今めかし 『源氏物語』 『宇津保物語』

はじめに

- 一. 「今めかし」の用例―人物表現として
  - 二. 否定される「今めかし」
  - 三. 先行する作品の類型の撰取 (一)
    - ― 『宇津保物語』 源正頼一族の例
  - 三. 先行する作品の類型の撰取 (二)
    - ― 『源氏物語』 右大臣一家
- おわりに

## はじめに

中関白家は、平安中期の貴族である藤原道隆一家の総称である<sup>(1)</sup>。彼らの動静は、『枕草子』や『栄花物語』に詳しく、中でも後者においては、主人公の道長一家と対立する一家としての描写が物語に精彩を加えている。道長が栄華に到達する前段階において、中関白家は看過することの出来ない存在である。その中関白家とは、どのような一家であったのか。『栄花物語』巻三には、次のような記述が見られる。

a 二月には内大臣殿の大姫君内へ参らせたまふ有様、いみじうののし  
 らせたまへり。殿の有様、北の方など宮仕にならひたまへれば、い  
 たう奥深なることをばいとわろきものに思して、今めかしう気近  
 き御有様なり。姫君十六ばかりにおはします。やがてその夜の内に  
 女御にならせたまひぬ。〔「さまざまのよろこび」、①、一六八頁〕

正暦元年(九九〇)二月<sup>(2)</sup>、道隆女の定子が入内した場面である。また、道隆没後には次のような描写もみられる。

b 故関白殿の御有様は、いとものはなやかに今めかしう愛敬づきて気  
 近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も、細殿つねにゆかしう  
 あらまほしげにぞ思ひたりし。〔「かかやく藤壺」、①、三〇二頁〕

aの記述を確認する。道隆の父の兼家がそうしたように、道隆も自身の娘を天皇に入内させることで天皇の外戚としての地位の確保を狙った。「北の方」は高階貴子を指す。貴子は円融朝の折、内侍として出仕し宮廷生活を経験している。その経験に従い、後宮での生活を順調に送るためにも、道隆らが重視したのは「奥深」さではなく、「今めかし」く「気近」いことであった。これを家風として、その後も道隆らは子女に教育を施した。そしてその道隆没後、貴族らがその家風を懐かしむ様子がbの記述となる。aと同様に、かつての中関白家の様子が語られ、道隆の威光を受けた定子の後宮が、いかに理想的な場所であったかが語られる。この場合は追想の際にも「今めかし」と「気近」さについて触れられており、両語が特に中関白家の家風であったことが示される。さらに、定子入内記事の後、道隆二女の原子入内記事には、原子の様子<sup>(3)</sup>が「今めかし」と繰り返し評され、夫妻の子女教育の徹底ぶりが読み取れるのである。こうして確認すると、両語のうち、まず、「今めかし」が『栄花物語』の中関白家を理解する際に、重要な語として考えて良いのではないだろうか<sup>(4)</sup>。

ところで、そもそも平安時代において、「今めかし」とはどのような意味を指すのだろうか。「今めかし」については、『源氏物語』の用例の多さとその内包する意味の複雑さから、これまで少なからず研究の蓄積がある。語義については、新聞進二氏<sup>(5)</sup>が『栄花物語』の用例を考察されたのを皮切りとして<sup>(6)</sup>、平安中期頃に成立した仮名作品の「今めかし」には、程度の差はあるものの、「はなやかさ」に代表される肯定的意味と、「軽薄さ」等を示す否定的意味にも用いられることが明らか

になっている。

新聞氏以降の研究で注目されるのは、大塚旦氏<sup>(7)</sup>や湯本なぎさ氏<sup>(8)</sup>の指摘であろう。両氏は、「今めかし」には伝統を超え、創造によって伝統美を脱する力があるとみる。物語作品以外については、『紫式部日記』の用例を村井幹子氏<sup>(9)</sup>が考察されている。村井氏によると、『紫式部日記』の用例は、「賛美表現(プラスイメージの語)」として使われているが、近接語彙ないし他の文脈との関わりにおいてそのほとんどがマインスイメージをも併せ持つという二重構造的機能を持つ<sup>(10)</sup>という。つまり、平安中期頃の人々にとって、「今めかし」とは賞賛すべき語でありながら、一方では否定される語として理解されていた点は、物語を読む上で留意すべきであろう。

後述するが、実際に用例を確認すると、平安時代において、「今めかし」は、はなやかさを意味する語である一方で、軽薄さに転じる危うさのある語として認識されていたことは動かない。この先行研究を踏まえると、そのような時代背景がありながら、「今めかし」きことを家風とするというものはやや軽薄な感が残る上、危うさははらむ語を家風とするということが容易には理解出来ない<sup>(10)</sup>。『栄花物語』の表現に限れば、「今めかし」は肯定的表現のみしかなく、この語を家風としていたということは、何ら問題がないようにも思える。しかし、『栄花物語』は史実に基づく歴史物語であるから、定子入内の折、中関白家の「有様」とした「今めかし」の、平安中期の語義と照らし合わせると、やはり疑問は残る。また、家風や性格として中関白家を「今めかし」とする記述も『栄花物語』以外にはみられない。作者は、どのような典拠を以てこの語を家風であったとしたのだろうか。

加納重文氏や、中村康夫氏<sup>(11)</sup>が、『栄花物語』を書く際、作者は紙資料の他に伝聞による口承資料も用いたことを指摘されたが、「今めかし」を家風としたことについても同様のことが言えるだろうか。これま

で、中関白家の家風に「今めかし」が用いられる根拠が提示される先行研究は管見の限りない。そのため、本稿では『栄花物語』の作者が中関白家の家風を「今めかし」としたことの意図を考察していく。多くの形容表現がある中で、なぜ作者はこの語を用いたのか。加納氏らの指摘に当てはめ、実際に作者が見聞きした情報に基づいて家風を「今めかし」としたと考えることは可能かもしれない。しかしながら、他の資料に家風としての「今めかし」という記述が残っていないため、別の理由、もしくは作者の意図によって「今めかし」とした可能性を探ることも、『栄花物語』を理解する上で必要な作業となると思われる。

この問題を解決するためには、作者がどのような場合に、特に、どのような人物に対して「今めかし」を用いているのかを確認する。先行研究ではあまり触れられていないが、どのような人物に使われているかを検討することで、単純に「今めかし」が肯定的意義で用いられる、とするのではなく、作中における「今めかし」の意義を明確にしたい。

他の物語作品に目を向け、『源氏物語』を含めた平安時代の「今めかし」を通観し、どのような人物に「今めかし」が使われているか検討していく。その上で、中関白家の家風としての用例に立ち返り、作者がなぜこの語を家風として用いたのかという作者の意図を明らかにしていく。また、本稿では契沖以来の卷三十を以て作者が変更されるとい説をとり、ひとまず正編の「今めかし」に着目したいため、論述の際には卷三十までの用例を特に扱う<sup>(12)</sup>。

なお、『栄花物語』の本文は、新編日本文学全集『栄花物語』①～③(山中裕ほか編、平成七年八月～十年三月、小学館刊)に拠った。『栄花物語』に限らず本稿に引用した作品および先行研究の本文に付している傍線等は論者による。また、本稿で「作者」と単に記述したものは、『栄花物語』の作者を示す。

## 一・「今めかし」の用例―人物表現として

作中の用例を確認すると、「今めかし」四十八例<sup>(13)</sup>、「今めく」二例の用例がある。『栄花物語』の「今めかし」が、常に肯定的表現として用いられていることは、新聞氏によって指摘されている。しかしながら、新聞氏の論文では『栄花物語』における用例の中で、人物表現についての詳細な論考がなされていない。本稿では「今めかし」が人物表現に用いられる際、どのような表現がなされているかを確認していく。

四十八例の用例のうち、正編における「今めかし」の用例数は四十例（「今めく」は二例）となり、各用例の内訳は次の通りである（表1）。

表1

対象	用例数	特記事項
人物	9	藤原登子（容貌、心様）：一例、藤原兼通男ら（様子に対して）：一例、中関白家（家風）：一例、藤原道隆（有様）：一例、藤原原子（心様、様子）：二例、藤原元子（何事にもいま一際）：一例、妍子と威子の女房（有様）：一例、三条天皇（心様）：一例、藤原彰子、妍子、威子の様子（心様、有様）：一例
楽の音	1	藤原城子（箏の琴）
行事・儀式・政治・祭祀	14	婚儀については次の通り（為平親王と源高明女、藤原頼通と隆姫、小一条院と藤原寛子、教通と祿子内親王）
邸宅・道具・風物	3	特記事項なし
後宮の様子・生活の様子	15	※「今めく」の用例を二例含む（うち一例は否定的表現）

「今めかし」が用いられる対象は、『源氏物語』同様多岐に亘るが、人物表現として用いられる例は決して多くはない。本稿では、まず人物表現に用いられる際、どのような人物に「今めかし」が用いられているかを確認したい。

## 【女性】

## c 藤原登子

かの宮の北の方は、御かたちも心もをかしう今めかしうおはしける、色めかしうさへおはしければ、かかることはあるなるべし。

〔月の宴〕、①、三六頁

## d 藤原原子

女御の御心ざまもはなやかに今めかしう、さまあしき御有様なり。年ごろ官耀殿を見たてまつりたる心地に、これは事にふれ今めかしう思さる。

〔みはてぬゆめ〕、①、一九八―一九九頁

## e 藤原元子

公季の中納言、などか劣らんとおぼして、さしつづき参らせてまつりたまふ。弘徽殿にぞ住みたまふ。これは何ごとにもいま一際は今めかしうさまさまにしたてまつることさらなり。

〔みはてぬゆめ〕、①、二二七頁

## f 彰子・妍子・威子

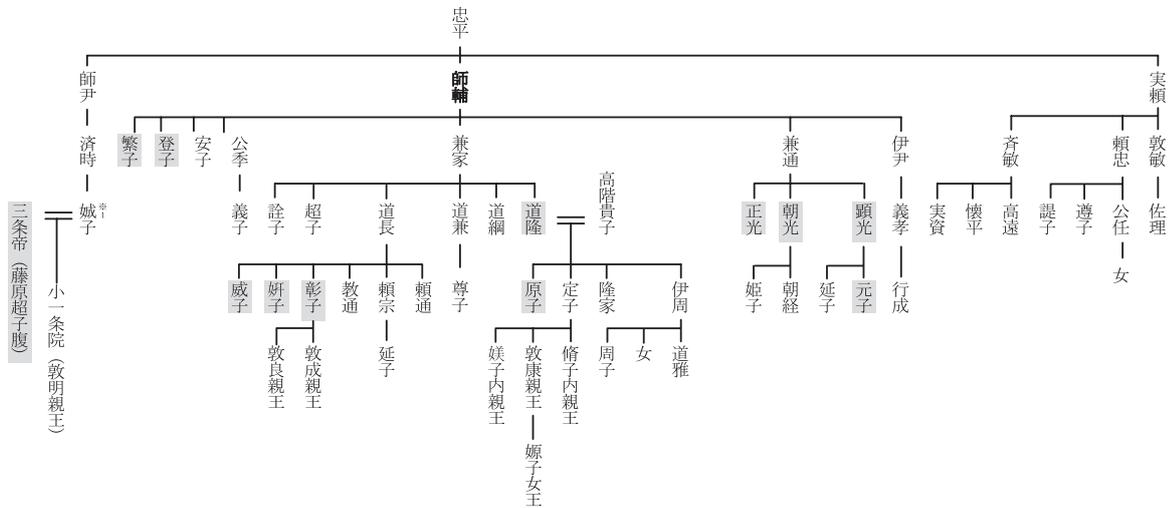
この御前たちは、御かたちこそさまおはしませ、御心掟、有様などは、いかでかくこたいなら今めかしう、さりとして端近にやはおはします、いかでかうさまさまめでたくおはしますにかと、見えさせたまふ。

〔あさみどり〕、②、一三八―一三九頁

各用例の対象者を見た時、気がつくのは藤原城子を除くすべての人物が藤原師輔の血脈、つまり九条流に連なるといふ点であろう（図1）。「今めかし」の人物表現として最も早く用いられるのはcの藤原登子の例と

図1 藤原氏系図

※1 城子の箏の琴の音色が「今めかし」と評価される。



なり、村上朝から一条朝まで、主に天皇の妃となった人物に用いられている。「今めかし」とともにc「をかし」、d「はなやか」、f「めでたし」が併用され、賛美的表現として用いられる。また、女性に対してはその入内の際に用いられることが多いことも注目される。「今めかし」き心様は天皇や東宮の心を惹き、それゆえに寵愛されるという形は『栄花物語』の語りの特性と言える。人物に直接使われる表現ではないが、次のような例も見られる。

g また先帝の、御箏の琴を宣耀殿女御にも教へたてまつらせたまひ、この大將にも教へさせたまひけるを、この姫君に殿教へきこえたまへりければ、まささまに今すこし今めかし添ひて弾かせたまふ、いみじうめでたし。  
 (「みはてぬゆめ」、①、一八五頁)

東宮時代の三条天皇に入内した藤原城子の記事である<sup>14)</sup>。dの用例において、後の三条天皇に入内した藤原原子の「今めかし」さに圧倒された城子であったが、入内当時は箏の琴の名手とされ、その音色は「今めかし」さも感じさせるものであった。「今めかし」さが最大限評価されるのは、やはり評される当人の心様や姿形にあるだろう。心様も容貌も現代風に優れた原子が入内した後、三条天皇は目新しさもある原子を「さまあしき」ほどに寵愛した。定子に続き、原子をも入内させた道隆の狙い通りに二人の娘は寵愛を受けることとなった。

eも他の用例と同じく、入内記事である。藤原道隆没後、定子不在の一条天皇の後宮には外戚としての地位の確立を狙った藤原顕光と藤原公季が珠玉の娘をこぞって入内させた。

h さて広幡の姫君参りたまひて、承香殿に住みたまふ。世のおぼえ、いでや、けしうはあらむ、あなこたいと聞ゆめれど、さしもあらず

めやすくもてなし思しめしたり。

〔みはてぬゆめ〕、①、一二七頁

先に入内した顕光女の義子も世間の予想に反して一条天皇の寵愛を受けたが、その義子にも何事にも増して「いままし今めかし」さを感じさせる元子の方が、より一条天皇の寵愛を受けたとされる。

fは後の後一条天皇に入内する際の威子を含めた彰子、妍子ら三人の女性を称賛する記事である。道長女に使われる「今めかし」はこの一例のみで、すでに入内していた彰子と妍子に対して「今めかし」が用いられるのはこの例が初例であり、作中では唯一の例となる。

#### 【男性】

i 藤原兼通男ら

その御男君達四五人おはして、いと今めかしう、世にあひめでたげに思したり。〔花山たづぬる中納言〕、①、九〇頁

j 藤原道隆

故関白殿の御有様は、いとものはなやかに今めかしう愛敬づきて気近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も、細殿つねにゆかしうあらまほしげにぞ思ひたりし。〔かかやく藤壺〕、①、三〇二頁

k 三条天皇

帝の御心いとをかしう、今めかしうらうらうじうおはします、何ごとももの栄えあるさまにおはしませば、よろづもてはやし思しめしたり。〔いはかげ〕、①、四八〇頁

男性にはどのように用いられているだろうか。男性の例としては、兼通男ら、三条天皇そして道隆の例がある。iは、兼通が関白に任せられた後、父の威光によってその息子らもはなはしく過ごしていることが

語られる記事である。kは、藤原道長女の妍子が三条天皇に入内する際、天皇が「今めかし」い人物であると記される。三条天皇には、藤原成子と原子が入内しており、引用dおよびgで今めかしさに魅かれる三条天皇の姿が描かれていたが、自身も今めかしい人物であることが記される。

jは、藤原道隆没後に、道隆の人となり追想されるという場面である。「今めかし」きことを選んだ中関白家の家風は、そのまま道隆の性格として語られる。その「今めかし」さが貴族社会においては受け入れられていたとされ、道隆没後も懐かしまれる。「今めかし」が用いられる男性を見ると、天皇と臣下を同列に論じることは性急であるが、いずれの人物についても、政権を得る可能性を秘めながら、権力を手中におさめることが出来なかった人物たちであることが言える。兼通男らは兼家男らにおされ、権勢を得ることを逃した。中関白家は道隆没後、子息の伊周・隆家兄弟が起こしたいわゆる長徳の変以降その威勢は失速し、やがて没落の一途をたどる。三条天皇については、『栄花物語』の論理では、道長との折り合いの悪さから退位し、子の小一条院も帝位につくことはかなわなかった。

ここまで、人物表現を確認した。人物表現の「今めかし」は作者の視点からの評価であり、それは客観的な評価といえる。そのような状況の中で、道隆が家風として積極的に今めかしさを求めたことは他の表現とは一線を画すと言えよう。用例数は中関白家のものが突出して多いわけではない。しかしながら、自ら「今めかし」さを求めるといって、これゆえに、中関白家は現在においても「今めかし」き一家として認識されている。

以上のように、人物表現としての「今めかし」は、村上朝から後一条朝までの九条流の人物に用いられてきた。男性については、いずれも権勢の中心に最も近づきながらも、権勢を維持することは出来ず、「今めかし」い状態を保つことが出来ないと言える。女性については、天皇や

東宮の寵愛を受けながらも、次代の天皇や東宮となるべき御子を授かることが出来なかった人物に用いられる。後見ということを重視する『栄花物語』において、天皇の皇子を産むことは天皇の外戚として、権勢を得るためには必須の条件である。『栄花物語』の「今めかし」の特色の一つとして、「今めかし」いことと政治における権力とは密接な関わりがあることが言える。後宮においては、「今めかし」い者が寵愛を受け、天皇の皇子を産む可能性が高くなる。これは天皇の外戚となり、ゆくゆくは天皇の祖父として権勢の中核に位置する可能性をもちあむこととなる。

このような使われ方がなされる中で、人物表現としての「今めかし」はfの用例を最後に特定の人物を指す表現としては用いられなくなる。威子の入内によって、道長が志す天皇の外戚となる準備はほぼ整ったことになる。威子入内後、道長は間もなく本格的に通世を志すようになる。その様子は巻十五以降に詳しい。道長の三人の娘に最後に「今めかし」を用いることで、作者はそこに普遍的な意味を持たせようとしたのではなからうか。これまで作者は道長前史として様々な人物に「今めかし」さを付与した。村上朝以降、各天皇ごとの在位中、その時代、つまり「今」最もはなやぐ人物として目される人物を「今めかし」と評価することで時代に小さな区切りをつけてきた。その最も大きな存在は中関白家とあってよいだろう。しかし時代は移り、かつて今めかしい存在であった中関白家はすでになく、次の時代は確実に訪れている。先行する作品にもしばしば用いられるこの語を取り込みながら、前代を摂取しつつも慎重な姿勢で「今めかし」を表現し、『栄花物語』の作者は以降、特定の人物に対して「今めかし」を用いることをやめたのであろう。

九条流の主だった人物には万遍なく使われているようにも見えるが、物語の軸となる道長・頼通親子に直接人物表現として用いられる例は見られない。『栄花物語』において、儀式や邸宅等、道長・頼通親子に関

連する事柄を「今めかし」とする用例はあるのだが、直接的に道長らを「今めかし」と表現することはない。これは、どのような意図があつてのことだろうか。考えられる要因の一つに、「今めかし」さの持つ否定的側面が関わることを指摘できるのではないだろうか。

## 二・否定される「今めかし」

冒頭で触れたように、新聞氏らの論考によって、「今めかし」には肯定・否定の両面があることが明らかとなっている。ただし、用例の確認が『源氏物語』のものに重点が置かれているため、『栄花物語』に先行する作品の状況は十分に明らかとなっていない。また、平安中期以降の用例についてはほとんど触れられていないため、『栄花物語』を除いた『源氏物語』以降に成立した作品の状況については明らかとなっていないものもある。「今めかし」を家風とすることについて理解をするためにも、他の作品の状況を確認する必要がある。なお、新聞氏によって『栄花物語』での否定的表現は花山院に用いられる「今めく」の一例のみと、圧倒的に肯定的表現として用いられていることがすでに明らかとなっている。

重松紀彦氏によると『源氏物語』に限れば、「今めかし」の意義の内、八パーセントが否定的表現となる<sup>15)</sup>。『源氏物語』の用例は、場面についてははなやかさや目新しさを表現する語として用いられるのだが、人の性質や振る舞いに対しては否定の意で用いられる。ここで問題となるのは、「今めかし」の否定的表現は『源氏物語』特有のものか否かということであろう。先述の通り、『栄花物語』の用例は肯定的意義に限定される。『日本国語大辞典』には、「今めかし」は「中世になると浅薄な面が強調されるようになる」と記述されている。物語作品において「今めかし」さとは、どのように否定されているのか。否定的側面を明確にすることによって、『栄花物語』における「今めかし」の特性を明らかにすることが期待される。

「今めかし」の否定的語義は、はやくは『宇津保物語』<sup>(16)</sup>で見られる。『宇津保物語』の用例は六例あり、そのうち否定的意義となるのは三例となる。

l いと心強く、今めかしき人々ののみふさひたまふ、心づきなし。

〔楼の上<sub>下</sub>〕、③、五一八頁〕

藤壺が、父の左大臣正頼に東宮の性格の危うさを訴える場面である。東宮は当世風な人々を自分に相応しいと考え伺候させ、伝統を軽視する姿勢を見せる。伝統を軽んじ、東宮学士の進講にも耳を傾けないという東宮の有様に対し、藤壺は苦言を呈するのである。この背景には、対立的立場ともいえる梨壺方の御子たちが伝統的な素養を重んじる姿勢に対して、自身の子である東宮は伝統を軽視しがちであることに對する藤壺の危機感がある。この場面については、湯本氏<sup>(17)</sup>が、藤壺の言葉には、学問や芸術において、その伝統を尊ぶ「古めかし」の精神性が必須であることが含まれていると指摘されている。梨壺方の御子たちは、伝統を受け継ぐことの出来る用意があるのに対し、東宮は伝統や学問を重んじることもなく当世風の人々を好む。その今めかしさへの傾倒を藤壺は非難するのである。この他、好色の意であるが、『宇津保物語』には次のような今めかしさの否定が述べられる場面がある。

m まめやかなることども、ありがたう覚えたまふさまなれば、あはれにまめまめしうのたまふを、御いらへ、今めかしからず、心恥づかしきほどに聞こえたまふ。

〔楼の上<sub>下</sub>〕、③、六二一〇頁〕

朱雀院が、長年追い続けた俊陰女に対し、最後まで色めいたことを述べるとの対して、俊陰女は「今めかし」さを匂わすこともなく、毅然とし

た態度で院に返答する場面である。『宇津保物語』を含め、若々しい男女の仲を「今めかし」と表現<sup>(18)</sup>する場合がある。そこから転じて、好色めいた語として使われていると思われるが、そのようなふるまいをよしとせず毅然とした態度は評価される。この表現の根底には、年齢や身分を考慮せず、いつまでも「今めかし」さを求めることに對する否定的な見方がある。「今めかし」さが、ともすれば好色という状態に変化することは注意すべきであろう。

n 権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。

〔絵合〕卷、②、二七六頁〕

「今めかし」の用例ではないが、語幹を同じくする「今めく」が『源氏物語』<sup>(19)</sup>の権中納言に用いられている。この頃、源氏は冷泉帝の後宮に養女の斎宮女御を入内させていた。ところがすでに冷泉帝には権中納言の娘である弘徽殿女御が入内しており、二人は冷泉帝の寵愛を得るため熾烈な争いをするようになる。寵愛の優劣は、そのまま双方の父親の政権の行方にもつながる。その争いの一つとして、帝の御前で二人の女御が持つ秘蔵の物語絵の優劣を競うことになる。「絵合」卷の権中納言の「今めかし」さを好む傾向は、源氏の「名高きゆゑ」を求める姿と対比的なことから、先行研究ではしばしば触れられている。「今めく」権中納言の性格は、すぐに源氏によって「御心ばへの若々しさこそあらたまりがたかめれ」〔絵合〕卷、②、三七七頁〕と弱くはあるが、やや否定よりの姿勢が示される。先に触れた通り、「今めく」については『栄花物語』における花山院にも用いられており、やや否定的な視点で以て描写がなされていることには注意したい。その用例は次の通り。

〇 三月ばかり、花山院には、五、六の宮をもてはやしきこえさせたまふとて、鶏合せさせたまひて見せたてまつらせたまふ。(中略)かかるほどに、世の中の京童べ方分きて、とりどりののしり、人の国までゆきていさかひのしりけり。かかる今めく事どもを、殿聞しめして、かいひそめておはしますこそよけれ、いでやと思しききてまつらせたまふほどに、院の内の有様、掟てさせたまふ事ども、いとおどろおどろしいみじ。(「はつはな」①、三七七―三七八頁)

『栄花物語』において、この一例のみが否定的表現となる。鶏合を行い、騒ぐ花山院を見て道長は心密かにその身分に不似合いな行動を批難する。似た例としては、時代は降るが『夜の寝覚』<sup>(20)</sup>にも次のような場面がある。

P 「明日の夜はまかでなむとするを、心のどかにきこえさすべきこともはべり、かならず渡りたまへ」と、のたまはせたるを、あまり今めかしくまつはしたてさせたまふも、いと心につかずおほさるれば、  
(後略) (巻三、二六七頁)

寝覚の上が、彼女を恋慕する東宮の母である太皇の宮の、若々しく親しげに接することに対して批判を行う場面である。過剰な「今めかし」さは時に批難の対象となる。主人公らを通して作者の意識が反映されているのであるが、各作品の用例に同様の傾向がみられることから、それは作者のみの意識の表れではなく、貴族社会における意識の表れであったとするのが妥当であろう。主人公らが敬遠し、否定的意義を常に持ち続けることには注意したい。物語ではないが、『枕草子』<sup>(21)</sup>にも次の用例がある。

q 「人をとらへて立てはべらぬなり」とのたまふも、いと今めかしく、身のほどに合はず、かたはらいたし。  
(第一七七段、三一―三二二頁)

中宮定子に出仕した新参の女房である清少納言を、定子の兄の伊周がからかう場面である。『新編全集』の頭注によると、「女が高貴な男をつかまえて立たせないというような行動は、古風な、年輩の女性には考えられないこと」と解し、清少納言の身分や年齢に相応しくない伊周の現代風な行動との訳が付されている。湯本氏は、「中宮の御前にもかかわらず、碎け過ぎていふということ」(二五一頁)と解される。大納言という身分に不釣り合いな行動をする伊周の、立場や場をわきまえない幼稚とも取れる行動はその身分にも、中宮の御前であるという場にも不似合なことであったのだろう。軽々しい伊周の態度を作者は「今めかし」として批難するのである。

以上から、「今めかし」ははなやかさを象徴する語としての意味を持ちながら、否定的な意味として用いられる例が各作品に見られることが分かる。『宇津保物語』以降、この語は正負両面を持ち、人々の意識の根底で認識されていた語であることは認められよう。最高の美を表現する語として古橋信孝氏<sup>(22)</sup>はとらえておられるが、最高というには危うさの残る語である。

以上のように、否定的側面をも持つという意義を踏まえると、やはり史実として中関白家が「今めかし」を家風としたというのはいかなり無理があるように思われる。それでは作者はどのような意図によって中関白家の家風を記したと考えるべきだろうか。次に、先行する作品においてどのような人物に「今めかし」が用いられるのかを確認する。

## 三、先行する作品の類型の摂取(一)

## — 『宇津保物語』源正頼一族の例

各作品で「今めかし」とされるのは次の人物となる(表2)。男女とも多く使われるが、特徴的であるのは、主人公と対立的立場にある人物の形容表現としてよく用いられている点ではないだろうか。各用例を検

表2

作品名	使われる人物
竹取物語	
宇津保物語	あて宮、源正頼、東宮(藤壺腹)、仁寿殿の女御、兼雅
落窪物語	《継母方》
源氏物語	玉鬘、紫の上、頭中将、右大臣、東宮(朱雀院御子、承香殿女御腹)、光源氏、夕霧、柏木、近江の君、式部卿宮(紫の上父)、一条御息所、藤壺中宮、六条御息所、軒端の萩、女三の宮、冷泉院、真木柱、蛭兵部卿宮、大君(玉鬘女)、匂宮
狭衣物語	狭衣の君
浜松中納言物語	東宮
夜の寝覚	寝覚の上
とりかへばや物語	宰相中将
栄花物語	登子、兼通男ら、中関白家、城子、原子、義子、繁子、公達、女房、女童、三条帝、小一条院、三后(彰子、妍子、威子)
大鏡	
枕草子	藤原伊周

討する。

『宇津保物語』において、長らく俊蔭一族と対立的構図を持ち続ける源氏の左大臣正頼の性格についての記述は、次のようになってい

r 「いでや。そのおとどこそ、目につきて覚えたまふらむな。身の上めでたく、今めかしくおはしますを見たてまつりたまひて後こそ、おのれをも思ひ落として、かく恥の限りのたまひ出だせ」

(「楼の上」<sup>23</sup>、③、四二七頁)

左大臣正頼は、藤原仲忠と並んで「万全の人」<sup>23</sup>として語られる。主人公らの対立的存在である正頼に、「今めかし」さを見出すことが出来るのは興味深い。兼雅によってその今めかしさが指摘される正頼であるが、先に引用した東宮が「今めかし」き人々を集めるという傾向も、正頼の血脈によるものだろうか。正頼女のあて宮についても、次のような記述がある。

s あて宮は、御年十二と申しける如月に、御裳たてまつる、ほどもなく大人になり出でたまふ。あるが中にかたち清らに、御心らうらうらじく、今めきたる御心にあり、ものの心も思し知りたれば、父おとど、母宮、限りなくかしづきたてまつりたまひて、(後略)

(「藤原の君」<sup>24</sup>、①、一三五―一三六頁)

藤壺が東宮に入内前、あて宮と呼ばれていた頃、その容貌も内面も秀でていることが記される。父の正頼も「今めかし」と表現されているが、あて宮はそれだけではない。女子の成人式をすませたばかりの年若い存在でありながら、その心映えも良く、分別もある理想的な女性として描かれる。この後も、あて宮の琴が「今めかし」いことが仲忠の評として

あり、あて宮の「今めかし」さが再度語られる（「嵯峨の院」、①、三四三頁）。この他に注意すべき用例は、「内侍のかみ」巻に見られる昔の人である嵯峨院の頃の承香殿の御息所と、今の人である仁寿殿の女御の筆跡を比べる場面にある。

t 「仁寿殿はうるせき人にこそありけれ。むかしより後の世までのいはゆる嵯峨の御時の女御ぞかし。今それに殊に劣らぬ手など走り書きけり。など正頼がもとにおこする文、これにおぼえたる筋の思はえぬ」とのたまふ。右大将、「かへりてこの御文は、今めきたる筋などまさりたりけり。持なり」と定められて、（後略）

（「内侍のかみ」、②、一八三頁）

正頼が若年の頃、偶然に垣間見た嵯峨院の頃の承香殿の御息所は容貌も素晴らしく、「魂の行くらむ方も知ら」ぬほど心を奪われたことを正頼自ら語る。あのように素晴らしい女性は今もいないと言う正頼に対して、右大将の兼雅は「仁寿殿の女御こそおはしますらめ」（「内侍のかみ」、②、一八一頁）と返す。仁寿殿の女御とは正頼の実娘を指す。いずれの女性が勝っているかという二人の論議は進み、やがて両女性の筆跡を見て、互いの子女を一人ずつ賭物にして勝負を決める。仁寿殿の女御の筆跡は、父の正頼も驚くほどの書きぶりで、正頼が理想として文を持ち歩くほど心酔する、承香殿の御息所の筆跡に勝るとも劣らない。甲乙つけがたい二人の筆跡は「持」となった。仁寿殿の女御も正頼の血筋らしい「今めかし」さを持つ女御であった。この正頼一族に対し、仲忠らは「古めきの族」とされ、両者は対比される<sup>24</sup>。

このように、『宇津保物語』においては主に源正頼の一族に「今めかし」さがあることが語られることが分かる。作品は変わるが、『落窪物語』では男君が女君の継母らを「今めかし」と暗に指摘したように<sup>25</sup>、「今

めかし」はしばしば主人公と対立する側の表現として用いられる。『落窪物語』では作者が積極的に継母方を「今めかし」と表現する訳ではないが、男君正頼の言葉として対比表現がなされることには注意すべきである。両作では用例が少ないが、「今めかし」さを好む好敵手というので見逃せないのは『源氏物語』の人物造型にあるう。

### 三．先行する作品の類型の摂取（二）

#### ― 『源氏物語』 右大臣一家

『源氏物語』と『栄花物語』の影響関係については、山中裕氏<sup>26</sup>が『源氏物語』の「須磨・明石」巻と、『栄花物語』巻五の類似性を指摘して以来、多くなされている。題材が歴史であるとはいえ、『栄花物語』も『源氏物語』以降の仮名作品として他の作品同様、影響を少なからず受けていることは明白である。『源氏物語』の表現でしばしば注目を浴びるのは、長らく源氏と対立することになる右大臣一家の存在である。各用例を確認する。

u そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音なひいとほなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。

（「花宴」巻、①、三六五頁）

かつて、源氏の母・桐壺更衣と対立した弘徽殿女御を擁する右大臣方は、古き物や奥ゆかしさを好まず、あくまではやかな当世風を好む人物とされた。「今めかし」さを重んじる右大臣方の有様だが、ここで注意すべきは「奥まりたるけはひ」が「立ちおくれ」ていることであろう。『栄花物語』に立ち返ると、中関白家についても次のような描写がある。

再び冒頭の引用を示す。

「いたう奥深なること」をばいとわるきものに思して、今めかしう氣  
近き御有様なり。〔さまざまのよろこび〕①、一六八頁

道隆室の貴子が宮廷生活を経てそこで得た経験から、中関白家は家風として「今めかし」さを求めたことを、冒頭で述べた。中関白家は、右大臣よりもさらに進んで「奥深」であることをはっきりと否定する形を取るため、明確に両描写が合致することはないが、奥深さよりも「今めかし」さを尊重する両者の姿勢は描写の点において近接する。「今めかし」いは右大臣だけではない。前段に引用した権中納言の「かどかどしくい  
まめきたまへる御心」と書かれるその性格はもちろんのこと、娘の玉鬘にも用いられる。

v 「人柄は、宮の御人にていとよかるべし。いまめかしくいとなまめ  
きたるさまして、さすがに賢く、過ちすまじくなどして、あはひ  
はめやすからむ。」〔藤袴〕巻、③、三三五―三三六頁

筑紫から出てきた玉鬘は、最初こそ田舎らしい娘であったが、源氏に生育されるにつれ、「今めかし」くなる。嶋谷惇子氏<sup>26)</sup>は、玉鬘の「今めかし」さは源氏によって付与されたものであると指摘されている。嶋谷氏の指摘は首肯すべき点もあるが、完全には同意出来ない。それは、付与された後、「今めかし」さを自身のものとしたのは玉鬘自身の美に対する鋭い感性と力によるものであるからである。単純に「今めかし」いものを付与されただけでは、自身も「今めかし」くなることは不可能であろう。田舎という何もないところから出てきた玉鬘には、都の華やかさは新鮮なものであっただろう。自身も都に住む王朝人としての薫陶

を源氏より受け、それを我が物にしたのは他ならぬ玉鬘の功績である。玉鬘もまた、右大臣方の血筋を受け継ぐ一人として源氏の世界に貢献していくのである<sup>28)</sup>。

前段と本段で確認したように、『栄花物語』に先行する作品においては、「今めかし」は主人公と対立的立場にある人々に対して用いられる。それはひとつの類型となり、『宇津保物語』以来使われてきた構図である。『栄花物語』の中関白家の用例に再度立ち返ると、冒頭の引用のように、その家風は「今めかし」とある。いずれの物語作品においても必ずしも「今めかし」や「今めく」が中関白家を含め、物語で主人公に対立する一族にのみ使用されるのではないが、その多くは対立する側の人々の性質として使われる。

以上を踏まえると、物語においては『宇津保物語』以来、対立する側の性質を表現する類型として、「今めかし」が使われており、『源氏物語』にも、『栄花物語』にも同様の傾向があることが指摘出来る。作者は闇雲に歴史を叙述しようとしたのではない。現在と違い、書くということにかかなりの制約がある中で、『栄花物語』の作者は起筆するにあたって、ある程度人物の造型をしていたはずである。作者によって「今めかし」きことを家風とされた中関白家であるが、それは史実によるものではなく、物語の流れを作ることを目的として、また、長らく道長の栄華を阻む一族として作者に目されたため、先行する作品の類型を中関白家にあてはめたために、中関白家の家風として「今めかし」が用いられたのだと考えられる。当時の読者も、『宇津保物語』の正頼方や、『源氏物語』の右大臣方を想起しながら二重三重に物語世界を膨らませ読んでいたのではないだろうか。そこにこの「今めかし」さの面白さと、人物表現として「今めかし」を用いた作者の巧妙な手法を見出すことは可能であろう。作者は、かなり慎重な姿勢で、計算をしながらこの「今めかし」を用いたと考える。

## おわりに

これまで、『栄花物語』とそれ以前に成立した作品の用例を確認し、中関白家の家風としての「今めかし」は、先行する作品からの類型の継承であったことを指摘した。もちろん、「今めかし」という語のみで、先行する作品の類型の継承を指摘することは出来ないが、『栄花物語』を解釈する際に、ひとつの重要な語として、まず「今めかし」について考察を行った。少し触れたが、九条流の人々に「今めかし」が用いられるのと同じく、例えば「気近」や「奥深」のように、特定の家にしばしば用いられる語は他にもみられる。これらを包括的に検討した上で、先行する物語作品の影響がどこまで読み取れるのか、『栄花物語』の独自性とは何かを検討し、『栄花物語』の作者がどのように歴史を表現しようとしたのかを読み取っていくことを今後の課題としたい。また、『栄花物語』における「今めかし」の語義や用法については検討が必要な部分が残っているため、続編の用例の検討も行っていくこととする。この後続く作品についても、「今めかし」については同様の類型が見られる。前代の流れを汲みつつ、一つの類型をさらに後代へと継承させた作品の一つとして、『栄花物語』も含まれるのではないかという可能性を指摘し、論考を終えたい<sup>(20)</sup>。

## 注

(1) 『国史大事典 第十卷』(国史大辞典編集委員会編、昭和六十四年一月、吉川弘文館刊)の「中関白家」には、「平安時代中期の関白、藤原道隆の一家の呼称。道隆が、摂関の権威を確立した父兼家と、摂関家の最盛期を築いた弟道長との中間に位置するための呼称といわれ、『大鏡』に道隆を「中関白殿」と書き、『中右記』永久元(一一二二)年五月四日条に「中関白子孫氏人」とみえるのはその早い用例であろう。(橋本義彦)」とある。

(2) 『日本紀略』によると、定子入内は二月ではなく正月二十五日であっ

た。なお、同書の二月十一日、定子に女御宣下のあったことが記される。先学によって指摘がなされているが、この例に限らず、『栄花物語』にはしばしば史実と合致しない記述がみられる。本稿では論考に問題が生じる場合を除き、論述の際には基本的に『栄花物語』の記述に従う。

(3) 原子入内記事は次の通り。

女御の御心ざまもはなやかに今めかしう、さまあしき御有様なり。年ごろ宣耀殿を見たてまつりたる心地に、これは事にふれ今めかしう思さる。

(「みはてぬゆめ」①、一九八―一九九頁)とあるが、ここでは見るのが恥ずかしいほど寵愛される様と解べきであろう。同様の用例は、巻二に花山院が寵愛する語として用いられている。

(4) 作中の「気近」の用例は九例あり、人物に対しては女院詮子と藤原道隆にそれぞれ二例ずつ、ほかには保子内親王(巻一)、綏子(巻四)、伊周女(大姫君。巻八)と敦成親王(巻八)に用いられている(残る一例は場面に対する表現)。一条天皇の母となった詮子の有様は、『栄花物語』では一つの成功例と言えよう。従って、詮子の「気近」さを踏まえ、道隆が家風としたのは自然なことであろう。なお、「気近」については増田繁夫氏の論考がすでにある(『栄花物語』の描く中宮定子と彰子の後宮―「気近さ」と「奥深さ」―)(『栄花物語』の新研究)平成十九年五月刊)。

(5) 新聞進一「栄華物語の「今めかし」に就いて」(『国語と国文学』昭和二十一年十二月号、昭和二十一年十一月刊)。なお、新聞氏は花山院に用いられる用例(巻八、①、三七九頁)を挙げ、「今めく」の用例については否定的意義を見出されておられる。

なお、『日本国語大辞典 第一巻(第二版)』(平成十二年十一月、小学館刊)には、次のように解説されている。「(1) 当世風でりっぱだ。目新しくすぐれている。気がきいてしゃれている。現代風で若々しい。(2) 現代風で、はなやかである。にぎわわし。陽気である。(3) 現代風で軽薄である。はなやか過ぎて感心しない。きざっぱい。(4) いまさらめいている。わざとらしい。改まっていて変である。」

- (6) 新聞氏以降の主な論考は次の通り。犬塚旦「今めかし考」(『国語国文』第二十卷第三号、昭和二十六年二月刊)、河添房江「六条院王権の聖性の維持をめぐって―玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」―」(『国語と国文学』昭和六十三年十月号)、上坂信男「今めかし・古めかし(一)―調和の美学―」(『源氏物語』の思惟―そのことば―に読む―)平成五年十月、右文書院刊)、池田節子「いまめかし」考―玉鬘十帖の光源氏―(『新 物語研究』平成七年十一月、有精堂刊)、内藤聡子「源氏物語」における「いまめかし」について(『愛知大学国文学』第三十六号、平成八年十月刊)、助川幸逸郎「今めかし」という方法―光源氏世界の栄華と衰頹をめぐって―(『国文学研究』第百十三集、平成九年六月刊)など。
- (7) 犬塚旦「再び「今めかし」について」(『平安文学研究』第十九輯、昭和三十一年十二月刊)。
- (8) 湯本なぎさ「今めかし・古めかし(二)―『源氏物語』を中心に―」(『源氏物語』の思惟―そのことば―に読む―)平成五年十月、右文書院刊)。
- (9) 村井幹子「『紫式部日記』の表現「いまめかし」をめぐって(2)―中宮女房批評における「いまめかし」の場合」(『中古文学論攷』第十九号、平成十年十二月刊)、『紫式部日記』の表現―「いまめかし」をめぐって(1)―(『源氏物語と王朝世界―中古文学論攷第二十九号―、平成十二年三月刊)
- (10) 消極的理由ではあるが、高階家の存在を指摘したい。道隆室の貴子は学問に秀でた高階家の出であり、貴子自身もその豊かな学才は当時から広く知られていた。貴子の教育による道隆の子らの学識の高さは現在でも理解されるが、貴子を含めた高階家が外戚にいる以上、道隆の立場が強くて、このような語を家風とすることは考えにくい。さらに、『大鏡』に貴子が「古体」であることが記されていることは注意すべきであろう。貴子の「古体」な側面は、『栄花物語』では見られない。本稿では「今めかし」の語義ではなく作品における用法を着眼点とするため、他の語と比較することはしない。しかしながら「古体」については、基本的には九条流以外の人物に用いられるが、例外的に藤原顕光に用いられる例もあること、また、語義も好悪両義に分かれ、複雑な語であると述べるに留めるが、これ
- (11) については「今めかし」の語義とともに別稿に記す。  
加納重文「記述の誤りをめぐって」(『歴史物語の思想』平成四年十二月刊。初出は「栄花物語の記述の誤りをめぐって」『国語国文』四十卷九号、昭和四十六年九月刊)。中村康夫「『栄花物語』と史実」(『王朝歴史物語の世界』平成三年六月、吉川弘文館刊)。
- (12) なお、続篇以降の用例は改めて検討を行う予定がある。
- (13) 新聞氏(注五、前掲論文)、池田氏(注六、前掲論文)によると、『栄花物語』の用例は五十例(内藤氏(注六、前掲論文)は四十四例とする)である。そうだが、稿者の確認では四十八例のみであった(「今めかし」四十七例、「いまめかし」一例)。なお、写本によって違うが、「今めかし」を「いかめしき」とする用例もある。文脈からはいずれにも取れるが、場面に用いられているため本稿では底本に従い「今めかし」の用例数から除外した。
- (14) 藤原成子については慎重に取り扱う必要がある。成子は藤原濟時女で、三条天皇の皇后である。成子の性格については、「奥深」であるという特徴があるが、『栄花物語』においては古体な性質を持ちながらも音楽については「今めかし」さをも併せ持つ女性とされる。「古体」は主に源氏や皇族に、「奥深」は小野宮流に連なる人物や皇族に用いられる語で、作中においては「今めかし」と同じく好悪両面を持つ複雑な語として用いられていることが指摘できる。両語については別稿に記したい。
- (15) 重松紀彦「源氏物語における「今めかし」について」(『源氏こぼれ草』巻十六、昭和五十六年三月刊)。
- (16) 『宇津保物語』の本文は、新編日本文学全集『宇津保物語』①③(中野幸一編、平成十一年五月〜十四年七月、小学館刊)に拠った。
- (17) 湯本氏、注八論文。
- (18) 同様の例は、『源氏物語』の光源氏や夕霧についても見られることが指摘されている。年齢を重ねてからの若々しい振る舞いについては、古橋信孝氏の指摘がある(『中年男の恋―いまめかしく振り返る』(『新編日本文学全集』二十三号、平成六年十月、小学館刊)。
- (19) 『源氏物語』の本文は、新編日本文学全集『源氏物語』①⑥(阿部秋生、今井源衛、秋山虔、鈴木日出男編、平成六年三月〜平成十年三月、小学館刊)に拠った。

- (20) 『夜の寢覚』の本文は、新編日本古典文学全集『夜の寢覚』（鈴木一雄編、平成八年九月、小学館刊）。
- (21) 『枕草子』の本文は、新編日本古典文学全集『枕草子』（松尾聡、永井和子編、平成十四年四月、小学館刊）に拠った。
- (22) 古橋信孝「短歌定型の成立 文化の〈型〉の生成と変容」（『日本の美学』第十三号、平成元年一月刊）。
- (23) 西本香子「宇津保物語」の藤氏排斥」（『明治大学大学院紀要（文学篇）』第二十九集、平成四年二月刊）。
- (24) 湯本氏、注8論文。
- (25) 『宇津保物語』の他には、『落窪物語』においても非常に興味深い用例がある。
- 「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきことも欲しからず、覚えも欲しからず、父母具したらむをともおぼえず。（中略）志たがはず花やかなる方にやりたてまつりて、御徳見むとおもうしたるか。（卷二、一六二頁）
- 主人公の道頼が、落窪の君と結婚を望むことを乳母に切々と訴える場面である。道頼は自身を「古めかし」い人間であると切り出し、「今めかし」きこと、つまり「花やかなる方」の継母方との縁談を欲することはなく、ただ意中の人である落窪の君との結婚を望むとする。明確な今めかしさの否定ではないが、主人公が今めかしさの象徴である継母の娘を望まないという姿勢に注目したい。継母らが「今めかし」と形容されることはないが、今めかしさは継母らの暗喩となっている。
- (26) 山中裕『歴史物語研究序説』（昭和三十七年八月、東京大学出版会刊）。
- (27) 嶋谷惇子、吉海直人「源氏物語」「いまめかし」再考―演出された美―」（『日本語日本文学』第十八号、平成十八年六月刊）。
- (28) 河添氏、注6論文。
- (29) 本稿の表2の内容と矛盾するように見えるが、これについては用例を示し、別稿に記す。

#### 【付記】

本稿は、ノートルダム清心女子大学第14回日本語日本文学会における口頭発表を基に執筆した。当日ご教示くださった先生方に御礼申し上げます。

# The Term “*imamekashi*” in *Eiga monogatari* and the Tradition of *naka no kanpaku-ke*

YOSHIDA Sayuri

The Graduate University of Advanced Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Literature

The family of Fujiwara no Michitaka has been called the *naka no kanpaku-ke* till now. The court lady Akazome Emon, the author of the *Eiga monogatari* (*The Tale of Eiga*, trans. as *A Tale of Flowering Fortunes*) presents in volume three the tradition of the *naka no kanpaku-ke* as “*imamekashi*.” However, if one checks other tales, there is nothing to support this characterization. Although Dr. Kanō Shigefumi indicated in 1971 that a family tradition is considered to be information acquired by hearsay, it may point the way in this case to understanding the discrepancy.

Beginning with the work of Dr. Shinma Shinichi, many researchers have tried to make clear the meaning of “*imamekashi*” and suggest that it is a “*hanayaka*” (a flowery expression) that refers to “*keihaku*” (frivolity). But what remains unclear is the reason why the tradition of *naka no kanpaku-ke* is said to be “*imamekashi*.”

This paper examines the use of *imamekashi* in previous tales written in the Heian period. In *The Tale of Utsuho*, *The Tale of Ochikubo*, and *The Tale of Genji*, all written before *Eiga monogatari*, *imamekashi* refers to a rival family. It seems that when the latter tale was written, Akazome Emon did not consult previous writings about *naka no kanpaku-ke* nor the tradition connected with them. She used this word *imamekashi* for *naka no kanpaku-ke* with her own intention. This understanding became the family tradition. As a result of my inquiry, I try to clarify this process.

**Key words:** *naka no kanpaku-ke*, *imamekashi*, *The Tale of Eiga*, *The Tale of Genji*, *The Tale of Ochikubo*, *The Tale of Utsuho*